



Title	ピランデルロの詩劇「取替子の寓話」に就いて
Author(s)	山口, 清
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1961, 1(1), p.1-7
Issue Date	1961-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/9485
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-27T21:47:53Z

ピランデルロの詩劇「取替子の寓話」に就いて

山 口 清

晩年のピランデルロの特色は神話と詩への傾向の中に見られる。彼は「新しき植民地」(La nuova colonia)「ラツザロ」(Lazzaro)「山の巨人たち」(I giganti dalla montagna)の三つの劇に神話という副題を付けた。また「息」(Soffio)「夕に、ゼラニウムが」(Di sera, un geranio)「訪問」(Vsiita)などを含む一群の短篇は神話的なものへの傾向を代表する作品である。

ピランデルロの詩劇「取替子の寓話」(La favola del figlio cambiato) (1934年)は短篇「取替子」(Il figlio cambiato)を発展させたものであるが、この詩劇も神話的な作品である。題材は南イタリアに行きわたっている伝説から取られている。然し同じ伝説は他の国々にもよくある。それによれば、空中には悪意を持った霊が住んでいる。それは一種の魔女であって「女たち」(シチリアの方言では *li donni* イタリア語では *le donne*)と呼ばれている。彼女等は冬の嵐の夜に家の屋根の上を飛び、狭い路を通って家の中へしのび入り、そこであらゆる種類の悪戯を働く。貧しい母たちに対しては、或る時はその赤ん坊を揺籃の中から取りあげて隣室の床の上に置き、また或る時は赤ん坊のつむった眼に骨ばった指を突きこんでその眼を斜視にする。また或る時は空中の魔女たちはもっとひどい悪戯を働き、揺籃の中の子供を取り替える。

この最後の場合が「取替子の寓話」の中では考えられている。南の海辺の国で、或る貧しい母が或る夜突然眼をさまして、彼女の赤ん坊、ブロンドの天使のようにかわいい子供が、彼女の側から姿を消し、その代りに醜い、やせた、かたわの子供が置いてあるのを発見する。絶望の淵に突き落とされたその母は、村中に警告を与える。そして友達と一緒に占者の女の家を訪ねる。「女た

ち」は彼女の子供をどこへ連れて行ったのであろうか。哀れな母の切なる願いとその烈しい苦しみに迫られて、占者の女は次のように言う。

『まことの子供は王様の宮殿にいます。若し誰もその子を見つけ出そうとしないなら、また母が彼女の家に連れられて来た別の子供を大事に育てるなら、まことの子供は幸福に生きるでしょう。』

寓話は貧しい母の言葉で始まる。それは詩劇のプロローグのような役目を果たしている。

『この新しい寓話を

聞きたいならば

私が着ている

この貧しい女の着物を信じなさい。

然し不幸の為に

不幸の為に私が流す

この母の涙も

信じなさい——』

この時奥から笑いが爆発する。それは様々であるが、すべて懐疑の笑いである。母は苦惱して、両手を顔に押し当てながら身を運ぶ。彼女は続けて言う。

『みんながこんなに笑います。

教育のある人々は

私が泣くのを見ているも

同情することもなく、

うるさいときえ思うのです。

「馬鹿な！馬鹿な！」と

私に向かって叫びます。

なぜならまことであるとは信じないからです、

私の息子

私のかわいい子供が……

然しあなた方は私を信じなければなりません。

証人たちを連れて来ましょう。

みんなが近所の

貧しい女たち

私のように貧しい母たちです。

みんなが互に識っており、

まことであることを知っています——』

母は証人たちに呼びかけて言う。

『さあ、おいでなさい、おいでなさい、

こわがることはありません。

「女たち」のいることが

嘘かまことかみんなの前で言いなさい——』

母たちのコーラスがこれに続く。それは呻くような『オオオー…オオオー…』という声で始まる。

母が赤ん坊を取り替えられてから既に多くの年月が過ぎ、悲しい諦めが彼女の苦難を包んでしまう。彼女のものでない息子も成長した。彼は醜い男で、頭が並はずれて大きい。悪い心を持った狂人で、村人は彼をからかって「王の息子」(Figlio-di-re)と呼んでいる。すると彼は自分は本当に王の息子だと信じて、何時も頭には厚紙の王冠をかむっている。

或る日海辺の別荘へ病気になったブロンドの美しい青年が到着する。彼は本当の王子(il Principe)で、北方の物悲しい、霧の深い、騒々しい国から、明るい太陽と健康とを求めて南の海辺へ連れられて来たのである。

年取った母の心には、この美しい王子こそ自分の本当の息子であるという考えが直ちに入りこむ。然し彼女は思い切ってこの青年に近付こうとはしない。なぜなら彼女は占者の女の予言が真実となるのを恐れるからである。

突然海辺の別荘へ王子の父王が殺害されたという知らせが届けられる。王子は国に帰って父王の後を継がねばならない。然しその夜別荘の庭に賊がしのびこみ、王子を殺害しようとする。王子は辛うじて難をまぬがれる。賊は厚紙の王冠をかむった「王の息子」である。彼は本当の王子を王位の占奪者として殺害を計ったのである。

本当の王子はこの時はじめて取替子の話を聞かされる。最早母も持たず、今やこの世にひとりぼっちとなった王子は、彼を自分の子と信じて愛している貧しい女に不思議と心を引かれる。王子は生きる為には太陽と愛情が必要であることを知り、彼女のもとにとゞまることを決心する。そして大臣たちには、自分の代りに、「王の息子」を霧と憎しみと悲しみの国へ連れて行かせようとする。王子は言う。

『汝の失われた』

自然な謙遜の感情

私はその泉の中に

両手をひたしに行く！

私は人生が

四月の草のように

私に於いて再び新しくされるのを望む。

去れよ、悲しい霧、かの煙、

ランプの光に貫かれたかの煙、

鉄の建築、

熔鉱炉、石炭、

盲目的でみじめな

心配でせわしい都会、

蟻塚！蟻塚！

私の慰めなき悲しみへの

曾ての愛を私は失った！

今や私は太陽と青空と緑と海との

この陶醉で満たされている！

大臣諸君，

諸君は諸君の国王を持っている。

彼はこゝにいる！彼を敬え！

国王は死んだ，国王万才！』

みんなが「王の息子」に対して「国王万才！」を叫び、母は王子に向けて「私の息子！私の息子！」と呼びかける。このようにして「取替子の寓話」の詩劇は終る。

「取替子の寓話」はピランデルロの神話「山の巨人たち」の中で劇中の劇として再び取り上げられる。その中でこの寓話は或る若い詩人が伯爵夫人イルゼ・パウルセンの為に書いた詩とされている。若い詩人は曾て女優であったイルゼ・パウルセンをこの詩によって再び舞台の生活に引き戻し、彼女の愛を得ようと望んだが、夫に貞節な彼女は詩人の求めを拒否する。そして詩人は絶望の中に自殺する。彼女は「取替子の寓話」の美しさに魅せられ、それを上演する為に伯爵夫人座という劇団を組織し、伯爵と共に家を捨て、遍歴の旅に出かける。然し世間の人々はこの詩劇の美しさを理解しない。上演のたびにそれは嘲笑と侮蔑を受けるばかりである。一時は多数の俳優を抱えた華やかな劇団も最後には僅か八人の旅役者の群に落ちぶれてしまう。それでもイルゼ・パウルセンは「取替子の寓話」の美しさを信じ、それを上演する機会を求め続ける。或る日、この旅役者の群は山の谷間の棄てられた別荘に辿りつく。この別荘は世を捨て、空想的な生活を営んでいる者たちの共同の住居となっている。彼等の頭はコトローネという名の魔術師である。コトローネは八人の旅役者にこの別荘にとゞまるようにすゝめるが、イルゼ・パウルセンはそれに同意出来ない。彼女は「取替子の寓話」を上演したい欲望にかり立てられる。コトローネ

の助けを得て、旅役者たちは山の巨人たちの結婚の宴に於いて詩劇を上演することとなる。山の巨人たちはこの詩劇を理解しない。原始人のような彼等にとってイルゼの芸術よりも歌や踊りの方がましである。彼女は巨人たちを罵る。それに立腹した巨人たちは彼女におそいかゝり彼女を殺してしまう。

イルゼ・パウルセンの運命は「取替子の寓話」の運命を象徴する。この詩劇は1934年の一月、マリピエーロの音楽を入れて、初めにブラウンシュヴァイクに於いて、次にはダルムシュタットに於いて上演され、かなりの成功を収めたけれども、ドイツ政府の命によって上演禁止にされた。この処置は批評家や政府高官の意見に従って取られたものである。禁止の理由は、この劇が社会の秩序を乱し、またドイツ国家の指令に反するものと考察されたことである。ピランデルロの台本に対しては、権威の原則に反し民族の純潔を汚すという非難が加えられ、マリピエーロの音楽に対しては反音調主義という非難が加えられた。

イタリアでこの寓話は同じ年の三月ローマで同じくマリピエーロの音楽を入れて上演されたが、それは失敗であったと言われている。然し一方に於いて同じ年はピランデルロがノーベル文学賞によって世界的な栄誉を与えられた年でもある。

彼はこの寓話に就いて次のように言った。

『寓話はそれを越える目的を絶対に持ち得ない。寓話はそれ自体の中で、その空想的な性格によって生きる。寓話からのどのような演繹も勝手である。これは寓話であって、たゞそれだけである。』

それでもこの寓話はその道徳的な態度、その理想的な意義、その諷刺を持っていた。この寓話がドイツで上演禁止にされたのは、まさにその態度、その意義、その諷刺の為であった。

自由、自然性、精神と肉体との健康、人間と人間を結ぶ絆の意識、これらのものは、若い王子に取って王国以上に貴いものである。彼は国王であることよ

りもまことの人間であることをえらぶ。ピランデルロはこの寓話によって無能者の暴力と偽善者の道德に対して抵抗を示しているように見える。

参 考 文 献

Arminio Janner: Luigi Pirandello, 1948

Luigi Ferrante: Pirandello, 1958

Cesare Guasco: Ragione e Mito nell' Arte di Luigi Pirandello, 1954

Nella Zoja: Luigi Pirandello, 1948